

イエスを信じる二つのワケ

(ヨハネ一四・一〜一二)

二度、三度と宙に舞う栗山監督を見ながら、「この人のズボンのすそ上げをやったつけ」と独りごちた。当時働いていたショップに彼が来て、タータンチェックのパンツを買ってくださったのだが、仕上がってみるとどうも短い。失敗したのだ。どれだけ叱られるかと思ったら、爽やかな笑顔で「まっいいよ、バイト君」と言われ、懲りずにもう一本買って下さった。勿論その裾上げは店長がやったのは言うまでもない。そんなことを思い出し、遠い目をしていたら「十年ぶりの日本一です」というアナウンサーの声で脳内時計は一気に二〇〇〇年代へ。あのヒルマン監督の「シンジラレナイ！」から十年。光陰矢の如しである。

閑話休題。ヨハネ福音書のイエスはよく信仰を迫るのだが、ここでもそうだ。十字架と言う、弟子達からの離別が刻々と近づく中、イエスは弟子たちに自らと、自らが啓示した神を信じ続けるよう弟子たちに命じている。今朝は主の弟子たちが主を信じ続けるための二つの理由について考えたい。

一、天の住まいが備えられるから

今でこそネックレスやイヤリングのモチーフになっているが元をたただせば十字架は刑具。つまりイエスは十字架によつて処刑された「元死刑囚」である。また死刑はその人の死をもつて刑の終了とするので、彼／彼女の生はそこで強制終了させられたと考えるのが普通である。しかしイエスは自らの死の先を見ておられ、そこですべきことを弟子たちに語られた。それが二節に書かれている永遠のいのちを得た信者が住まう場所を備えるということだった。ちなみに七〇年代に日本語で書かれた注解書には「天国には住宅難はない」なるコメントがあつたが「ウサギ小屋」とも揶揄された当時の日本の住宅事情が透けて見えるようで面白い。今日では人口減少のゆえに空き家は増えているが、その活用もままならず貧困の拡大によつて住む家を失う人も増えている。だがイエスを信じる者は安心だ。永遠のいのちを得る私たちのためにイエスが自身を永遠の住まいを準備しておられるのだから。あのエルビスも歌った賛美「丘の上の家」ではこの「家」は「マンション」と訳される。これは日本語的な集合住宅ではなく、大邸宅を意味する。確かにこの地上ではいろいろなることがあるが、イエスを信

じる者には大邸宅が待っているのである。

二、イエスが迎えてくださるから

このようにイエスは私たち信徒のために場所を備えるために十字架にかけられたのだが、彼はまたそこから私たちを迎えるために戻つてくるとも語られている(三節)。これは明らかに再臨を示している。聖書の神、三位一体の神はイエスを信じ、イエスを通じて神を信じたものとともにおられる。これが大切である。よし金や銀の道のかなたに大邸宅があつたとしても、ぽつねんと一人で居たならば、なんとも味気ないし、そんな天国ならば正直大してよいところだとも思えない。さびしいじゃないか。しかしイエスは天国について私たちを自ら出迎えてくださる。イエスとともに歩むこの世での信者の生活はすばらしい。それはよく天国の前味とも表現される。だが前味はどこまで行つても前味でしかない。考えてみよう。ジョエル・ロブションでオードブルだけを食べて「もう十分堪能しました」と言う人が居たならば、かなりの変人だろう。そう考えていくと天に登ったイエスが、私たちを一人ひとり名前を呼び、親しく天国の豪邸に迎えて下さるといふ光景は私たちが信仰を持ち続けるのに十二分な動力を提供する。現に

殉教者はみな天国の幻を抱いて旅立ったのである。

* * *

この言葉が語られたかの日、弟子たちはこのイエスのことばを理解することはなかつた。復活を信じられなかつたトマスは不信はこの箇所においてもう見え隠れしているし、ごく早い時点でイエスに出会ったピリポもまたイエスが何度も語っていた「父なる神に遣わされ、神の栄光を完全に現した御子イエス」というコンセプトを理解することはなかつた。それでもイエスはあきらめなかつた。何故か。簡単である。イエスが死んで復活されたのち、これらのことを彼らが「思い起こす」ためである。そのためイエスは悟りのない弟子たちの足を黙して洗い、教え続けられたのだ。忍耐深いと言うほかない。この忍耐深く、相手を思う行動こそ真の愛なのだ。友よ、このイエスを信じよう。いや信じ続けよう。そうすればイエスの道、真理の道、いのちの道を信仰によつて歩める。更に天国の前味を堪能したのちにはイエスご自身があなたを天の大邸宅に迎え入れて下さる。これこそ伝統的にして正統的なキリスト教的希望である。信仰によつて歩み続けようではないか。